

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	すてっぷ小椋			
○保護者評価実施期間	令和7年 1月 4日		～	令和7年 2月 28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	13名	(回答者数)	10名
○従業者評価実施期間	令和7年 1月 4日		～	令和7年 1月 31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5名	(回答者数)	5名
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年 3月 3日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・児童との関わりの中で「褒める」「受容する」事を中心に関わっている。そこから児童や保護者との信頼関係の構築に繋げ、生活する上でのアドバイスや、保護者だけの子育てでなくチームとして一緒に考え支えあっていく事を大切にしている。日々の振り返りや申し送りを大事に情報の共有を密に行っている。	・児童や保護者と関わる際、こちらからの伝え方に特に注意して日々活動を行っている。声掛けは一方的でないか、相手にこちらの狙いは伝わっているのか、伝わっていない場合どのような伝え方がいいのか、スタッフ同士よく確認しあっている。声掛けだけでなく、ホワイトボードやプリント、写真等を使い視覚支援も念入りに行っている。	・児童発達支援管理責任者だけでなく、スタッフ一人一人の担当児童の人数も増やし、より多くの視点で児童や保護者に関わっていくようにしている。 ・スタッフ一人一人が話しやすい環境、関係作りに努め、ミーティングが活発になるよう取り組んでいる。
2	・子供たちの「気付く」「考える」「伝える」といったコミュニケーション力の向上が最近ではよく見られる。この1から2年の間、気持ちの切り替えが早くなったり、イライラした時に言葉で伝えられるようになってきたと保護者からお声が多くなった。	・児童と関わる際には、まず相手の話を最後まで聞いたうえでこちらからの声掛けを行うようにしている。(一旦受容するようにしている) その後本人が「そういう事か」「次からそうやってみる」と自分なりの答えが出せるような声掛けを行っている。(問を置いた方がいい場合は時間をかけて話し合う) ・児童同士でのやり取りではどちらか一方的にならないように大人が仲立ちする事を徹底している。特に遊びのルール設定にはお互いの意見も聞きながら納得できるよう話し合いの時間を長く設ける。纏まらない場合はアドバイスを出す、最終決定は児同士が出来るよう進める。	・大人がいる事で児童同士、安心して過ごせている様子が見られる。更なる充実の為、現在は大人だけでなく、やり取りの経験から成長した児童を大人のポジションに持っていく「自分も昔はさ・・・」と他児に先輩としてアドバイス出来るようプログラムを行っている。(伝えた児童自身の自己肯定感の向上にも繋がっている)
3	・子供たち同士での遊びの発展や気持ちの切り替えが出来るようになってきている。 ・子供たち同士のやり取りに時間をかける事で、「前は〇〇なルールだったよね」「次は△△さんの考えたルールでやってみよう」と提案、決定が出来てきている。	・大人が必要以上に介入する事なく見守り、児童一人一人の意見が出しやすいよう場の雰囲気作りを行っている。 伝える事や聞く事で「言ってもよかった」「そういう意味で言ってたんだね」と、気付く事や考える事に繋げている。	・一日の時間の使い方を毎日確認し、やり取りに多めに時間が取れるよう時間の使い方を見直すよう心掛けている。時には保護者の協力も得て、送迎時間をずらし児童との振り返りにかなり時間をかける事もある。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	・距離や時間割の関係上、新規の小学校のお迎えコースの増設が難しい。曜日によってご利用者の人数にばらつきがあり、定員充足にならない曜日がある事。	・職員の人数や学校の下校時間、送り迎えの出来る距離など複合的な理由から、安易にご利用者の方々の受け入れを増やせない事。	・引き続き相談員さんへの声掛けから利用者の見学、体験の機会を増やす事や、お休みになった児童によって空いた枠が利用可能な事を伝え、その時々のニーズに応じた利用がしやすい環境づくりが必要と考える。密に保護者とのコミュニケーションを取っていく事が大切と考える。
2	・発達障害の診断を受けた利用児が全体の9割を占めており、障害種別で見た場合偏りのある事業所となっている。	・事業所がスタートした時から変わらず8～9割の利用者が発達障害の診断を受けた児童だった流れが、現在までも続いている。「身体」や「知的」障がいの診断を受けて見学に来た保護者が「うちの子とは合わないはず」と利用をお断りしてくる事が過去にあった。	・見学、体験に来た児に対し職員がマンツーマンで対応したり、本人のニーズや課題に対して良い支援が提示出来るようアセスメントの強化や相談員さんとの密な情報共有を行い、「ここならうちの子は伸びる」「安心して預けられる」と思っていたような事業所にしていく必要がある。
3	・HPやSNSを上手く使っておらず、事業所からの周知、認知への発信が弱い事。	・利用者の受け入れに対してのアピール、保護者会や大々的な活動の企画といったイベント的な活動に取り組めていない事。	・一日の時間の使い方の見直しを行い、SNSやHPの活用を強化していく。年間、月間スケジュールの確認を行い定期的なイベント開催に繋げていく。